

## コミュニティと復興への創造力を育む仮設カスタマイズ — 仙台・あすと長町仮設住宅での仮設から本設への居住支援 —

プロジェクト代表者：新 井 信 幸<sup>1)</sup>

プロジェクト参加者：伊 藤 美由紀<sup>2)</sup>

プロジェクト連携先：あすと長町仮設住宅自治会

### The Temporary Housing Customization to Develop Community and Creativity for Restoration.

— Housing support activities at the Asuto-Nagamachi temporary housing in Sendai —

#### Abstract

This project was designed to help residents improve their environment based on their specific needs. It was inspired by requests for more storage space in temporary housing facilities. What made the project unique was that instead of simply making something for residents, we visited the facility and created things with them. In other words, the residents were directly involved in customizing their dwellings. I and some my students organized the Temporary Housing Customization Support Team by June 2011. We also held an event called Customize Café at the Asuto-Nagamachi temporary housing. Later, this event was held in Shiogama, Minami-sanriku, Oofunato and Ishinomaki. At present, restoration housings are planned by the administration. We are supporting to propose a construction of restoration housing for Asuto-Nagamachi residents.

#### 1. はじめに

鉄板剥き出しのプレハブが整然と並ぶ「あすと長町仮設住宅（仙台市）」では、入居開始当初から住みにくいといった声があがっていた。玄関の庇の拡張や断熱壁の設置等の追加工事によって、多少の居住性能が改善したものの室内の狭さは相変わらずである。そうしたなか、筆者の研究室では本学安全安心生活デザイン学科伊藤美由紀研究室とともに、昨年5月から仮設住宅の軒先や室内に収納等を制作するという取り組みを実施している。一方、「あすと長町仮設住宅（以降「あすと仮設」とする）」では、多様な支援活動が展開されており、おそらくソフト面では最も恵まれた仮設住宅の一つである。そうしたことが影響してか、入居開始当初、殺伐としていた人間関係も、現在では自治会が中心となって共助型のコミュニティが醸成されつつある。さらに今後の生活再建に向けて、「あすと仮設」で生まれたコミュニティを継承した復興住宅づくりの動きもみられており、住民主体の復興に向けてほどよい活気が湧きだっている。

そこで本稿では、筆者らが取り組んでいる仮設住宅での収納制作等の活動を紹介するとともに、「あすと仮設」の入居から現在までのコミュニティの状況を概観し、仮設から

---

1) 東北工業大学 建築学科 講師

2) 東北工業大学 安全安心生活デザイン学科 准教授

本設（復興住宅）に向けた居住支援のあり方を展望してみたいと思う。

## 2. あすと長町仮設住宅の概要

仙台市内には、現在1万戸を超える仮設住宅が存在している。その内訳は新規に建設されたもの（通称で「プレハブ仮設」という）が19団地1,523戸、民間賃貸住宅を借り上げたもの（仮設住宅とみなしているので、通称で「みなし仮設」という）が約8,500戸となっており、被災者の多くが「プレハブ仮設」に入居しているという一般認識とは少し異なる状況となっている。これは仙台が大都市ゆえ賃貸住宅市場が量的に充実しているからであり、他の被災地域と状況が全く違ったものとなっている。また「プレハブ仮設」と「みなし仮設」ではそれぞれの入居者に少し傾向がみられる。高齢世帯やペットを飼っている世帯は、民間賃貸住宅では家主等から入居を断られるケースがあるため、結果的に「プレハブ仮設」に集まってきている。また立地については、「プレハブ仮設」の多くは津波が止まった東部道路の少し西側にある公園や空き地に点在しているが、「みなし仮設」については個人情報の観点から実態が明らかにされておらず（図1）、行政機関以外は市内にどのように分布しているか把握できていない。なお、プレハブ仮設の「あすと仮設(233戸）」（図2）は、他の仮設住宅とは少し離れた市街地内部の再開発エリアに位置している。

仮設住宅の建設当初、仙台市は高齢者の孤立を防ぐ主旨で、入居には1組10世帯以上での申請を原則としていたが、むしろそうした制約がネックとなって、市内で最も早い4月下旬に入居が開始された「あすと仮設」では、1次募集の際には3グループ25世帯しか入居してこなかった（5世帯途中離脱）。この3グループのうち、2グループは仙台沿岸地域からで、残り1グループは損壊したマンションからの入居であった。6月の2次募集の際には1組5世帯以上と条件が緩和され、加えて、高齢者・障がい者のいる世帯は単独でも入居が可能となった。その結果、233戸のうち150戸余りが埋まることとなったのだが、そのほとんどが高齢者世帯の単独入居となり、グループ入居は2組だけに留まった。これらの単独入居世帯のなかには、気仙沼、南三陸、石巻、福島県の南相馬といった遠方からの転入が少なくなかった。8月の3次募集で残りのほぼ全てが埋まったが、この時点で「あすと仮設」は高齢化率の極めて高い、多地域から寄せ集まった見知らぬ者同士の集



図1. 仙台市内の仮設住宅団地の分布



図2. あすと長町仮設住宅敷地図

住体となった。そのため、入居初期のころはゴミ出しや駐車位置のことで些細なトラブルが頻発し、自治組織成立に向けても採め事が少なくなかったという。それでも8月になって、漸く5つのグループが中心となって自治組織が結成された。

### 3. 入居開始当初からの支援

「あすと仮設」では入居開始当初から居住者の支援を行ってきた団体が二つある。その一つが「社団法人パーソナルサポートセンター（P S C）」という、もともと生活困窮者の自立支援等を仙台市内で実施するため、2011年3月上旬に登録したばかりの団体である。そうした矢先に地震が起き、急きょ被災者支援に取り組むことになった。具体的には、平日の日中、10名程度の支援員が仮設団地内を巡回し、独居高齢者を中心に声かけを行っている。さらに、居住者の生きがい創出やコミュニティ形成のサポートにも取り組んでいる。例えば、畑いじりをしたいという人たちのために近所にある畑を利用できるようにしたり、自治組織の立ち上げのための根回し等もしたり献身的に動いている。8月に自治組織が設立するまでは、居住者と役所との板挟みにあうなど苦労も多かったようであるが、その後は、自治組織とも連携しながら仮設住宅のコミュニティの運営に携わり、心配された孤独死も発生せず、仮設住宅での支援活動の中心的存在として機能している。

もう一つは、「長町まざらいん」という地元のまちづくりNPO（任意団体）が、昨年5月から毎月第2週目の土日に、仮設の集会所を利用してコミュニティ・カフェ「ふれあいサロン」を運営している。当初は生活物資が不足している人も多かったため、カフェだけでなく日用品や衣類等の無料提供を実施していた。6月には、囲碁を教える団体、木板に習字の表札をつくるボランティア、近隣の病院による健康チェック、地元金融機関によるローンの相談対応等がふれあいサロンに参加した。このような形で現在まで続けられており、今年1月からはサロン運営に自治組織が加わるようになった。

### 4. 仮設カスタマイズお助け隊の活動概要

ここからは、筆者が学生たちと取り組んでいる活動を紹介したい。

筆者が昨年5月の「ふれあいサロン」に参加していたところ、「収納がほしいんだよ」という居住者のつぶやきを耳にしたことから、研究室の学生たちと軒先収納づくりを始めることになった。はじめに手掛けたのは、マンション損壊のため仮設住宅に入居した大湯さん（50代・男性）のところで、「当面使わなくなった石油ストーブや靴類を入れるものがほしい」というので、玄関先に設置することにした。まずは学生たちに図面を描かせ、雨が入らないか、開閉部は使いやすいか、見た目はそれなりに美しいか、安くつくれるか等をチェックして設計を完成させた。工具や材料は近くのホームセンターで買い揃え、直ちに組み立てに入った。作業は4、5名で3、4日かけて第一号を完成させた（図3）。思っていたよりもスムーズに、そして作業自体が楽しかったので、学生たちもやりがいを見出していったようであった。「近所から収納を見にくる人がいてね。写真撮ってもいいよと言ってんだよ」と大湯さんが言うように、仮設住宅内にわれわれの噂が少しずつ広まり、そのお陰で依頼が増え、すぐに第二号の制作に取り掛かることになった。

今度は少し遊び心も加えて、ご近所さん同士の井戸端会議や夕涼みにも使えるように、縁台型の収納をつくることにした（図4）。真夏の炎天下、組み立て作業を進めていった。すると飼い犬の散歩途中だった男性が「あんちゃんよ。そんな手つきじゃダメだっちゃ」と割り入ってきた（図5）。男性は松岡さん（50代）という建設工事の職人さんだった。



慣れた手つきで学生を指導して、結局、完成までの二日間みっちりお付き合いいただいた。

その後は、徐々に作業も増えてきたので、「仮設カスタマイズお助け隊」と名付けて、正式に組織立てて継続的に活動を進めていくことにした。また、これを機に①仮設居住環境の向上、②居住者参加による意欲の向上、③居場所の創造によるコミュニティ形成への寄与を主な活動の目的とすることにした。



図3. 軒先収納第一号



図4. 軒先収納第二号の制作風景



図5. 飛び入りで参加する居住者の大工さん

### 5. 仮設カスタマイズがコミュニケーションの場に

軒先収納第一号のときも、第二号のときもそうだったが、軒先で作業をしていると「何ができるの?」「うちにも作ってくれるの?」と、ご近所さんや散歩中の人たちがちょくちょく声をかけてきてくれる。炎天下の作業を気にかけて、「かぶりなさい」と帽子を持ってきてくれた老夫婦もいた。とにかく、学生たちが作業をしているときは、必ずと言っていいほど近所の誰かがのぞきにきていた。それらがやがて小さな輪となって、居住者同士そこで顔見知りになったりもした。軒先での作業がちょっとしたコミュニケーションの場となっていったのである(図6)。収納以外にも広場や軒先に置く縁台をつくった。出来上がった縁台では、杖をついたおばあちゃんがちょこんと座っていたり、夏場になると夕涼みの

宴会に使用したりする光景も見られるようになった（図7）。

秋になって、もっと居住者に参加してもらおうと広場でカフェをやりながら、その傍らで縁台等を制作するといったイベントを行った（図8, 9）。このイベントは2日間かけて開催し、カスタマイズが盛んなお宅を拝見するツアー、新潟大学岩佐明彦研究室の協力を得て仮設住宅の住みこなしレクチャーやカスタマイズコンテストも開催し、多くの居住者や外部支援者の参加があり大盛況であった（図10, 11）。このイベントが全国紙やTVのニュース番組にも取り上げられたこともあって、他の仮設住宅からもお呼びがかかるようになり、11月には塩釜市、南三陸町、岩手県大船渡市の仮設住宅に出張でイベントを開催した。いずれも好天に恵まれて盛況であった。年が明けて、今年5月にも石巻市内の仮設住宅にて2日間開催した。



図6. 作業の様子を見にくる居住者



図7. 軒先での宴会風景



図8. イベントでの収納制作



図9. イベントでの屋台カフェ



図10. お宅拝見ツアー



図11. カスタマイズコンテスト



こうしたイベント以外にも、「あすと仮設」で日常的に収納等の制作に取り組んできて、これまでに軒先収納10台、縁台20台、室内棚40箇所以上、シャワーフックの付替え15箇所以上等の実績をあげている。

## 6. その他の多様な支援活動

筆者らの他にも「あすと仮設」で継続して支援活動を実施しているのが、「アートインクルージョン実行委員会」という地元アーティストたちが中心となっているグループで、仮設住宅をアートで楽しく元気にといった視点から、壁面をアートペインティングしたり、集会所の玄関先をカラフルなプラスチックブロックでデコレーションしたり、おしるこカフェ、ジャズやクラシックのコンサート等も開催したりしている。

その他にも外部から多様な支援が入ってきており、昨年の夏ごろまでは物資提供が多かったが、その後は、筆者が目にしたものだけでも、マッサージ、散髪、トン汁等の炊き出し、和太鼓演奏、沖縄民謡演奏、アイドルのミニコンサート等がある。こうした状況は現在も続いていて、集会所の予約は1カ月先までイベントや支援活動で埋まっている。

では、なぜそんなに外部からの支援に恵まれているのか。それには、いくつか要因があるように思われるが、一つ目は、まちづくりを担う団体が存在する民度の高い地域に立地したということがあげられよう。ふれあいサロンを実施している「長町まざらいん」自体も、障がい者支援団体、子育て支援グループ、街角スケッチグループ、コミュニティFM等が集まって結成されたNPOである。二つ目は、交通の便の良さということになる。「あすと仮設」は、新幹線や在来線の車窓からも見えるところに位置するため、仙台を訪れる多くの人々の目に自然と触れることになっている。最後は、やはり自治組織の方々のオープンマインドな気質にあるのだろう。鈴木会長（初代）さんは「来るものは拒みません」とよく笑顔で話していた。

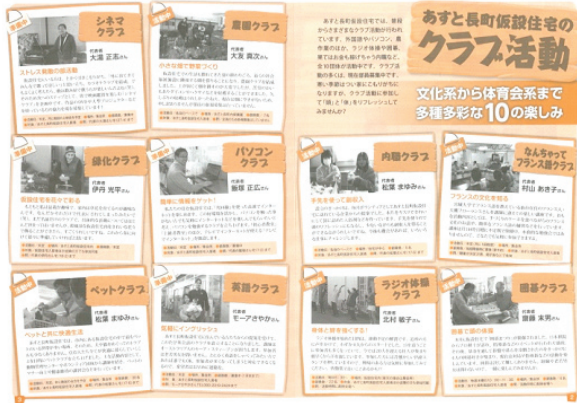
## 7. 育まれつつある共助型コミュニティとその継承

現在では、ラジオ体操、内職、農園、ペット、英会話等、10種類ほどのクラブ活動が「あすと仮設」で動き出しており、仮設の生活を楽しみ合う関係が生成している（図12）。これらの活動は自然発生的にできあがったものであるが、継続して支援している団体が数多くあることで、居住者と支援者との顔見知りの関係が広がって、それが安心感や活動意欲の向上にもつながっていったのだろうと推察する。さらに最近では、見守り支援もPSC任せではなく自前でやるべきではないかといった意見が居住者から出てきている。入居当初の殺伐とした雰囲気だった仮設住宅の状況を思いおこすと、わずか1年足らずの間に居住者同士が楽しみ合いながら支え合う関係が育まれたことについては、感慨深いものを感じる。

筆者はこうした仮設住宅で育まれた楽しみ合いながら支え合う関係、言い換えれば「共助型コミュニティ」が、仮設居住の期間だけのものではなく、その先の復興公営住宅にも引き継がれていくべきではないかと考えている。そうでなければ、再び復興公営住宅で寄せ集めの見知らぬ者同士の状態が生まれ、様々なトラブルの発生や高齢者の孤立が懸念されるからである。そんななか、独居の高齢者からは「ここ（あすと仮設）にいると安心ですごく住み心地がいい」といった旨の声が上がっている。こうした声は一人だけでなく、数人から幾度となく聞かされている。そうした状況を踏まえると、その先に安心して暮らせる環境が整っていなければ、積極的に移っていこうとしない人も出てくるのが予想さ

れる。だとすると、余計にコミュニティを次のステップに継承していく意義は大きいと思われる。

しかしながら、「あすと仮設」は多様な地域からの寄せ集めの状態にあるため、その多くは基本的には従前に暮らしていた地域に戻ることを希望しているものと思われる。その点がとても悩ましいところなのであるが、それでも、このコミュニティの一部が、同じ復興公営住宅に移ることができれば、それを核として仮設での経験を踏まえて、再び楽しみ合いながら支え合う関係を構築していってくれることが期待できる。



左・図12. あすと長町仮設住宅のクラブ活動（出典：復興地域かわら版みらいん第2号）  
 右・図13. 居住者主体の復興住宅検討会の様子

## 8. 動き始めた居住者主体の復興住宅づくり

こうしたなか、「あすと仮設」では居住者主体の復興住宅づくりが動き出している（図13）。この動きは、「せっかく育まれたコミュニティなのだから復興住宅に残していきたいし、高齢者が安心して暮らせる環境を維持していきたい」という自治会新会長の飯塚さんの発意から生まれたもので、2012年4月から筆者らと住まいまちづくりの専門家（本学、小杉学准教授を含む日本建築学会・地域居住小委員会メンバー他）がサポートしながら、コミュニティが継承される復興住宅の計画のあり方を検討している。現在仮設住宅が建っている「あすと仮設」の敷地に復興住宅を建てて、コミュニティを維持したいという声が出てきているので、その可能性について追及しようとして動き出している。こうした現在進行形の取り組みについては、筆者のブログ（<http://ameblo.jp/no-arai/>）で随時公開しているので、詳しくはそちらを参照されたい。

ここまで「あすと仮設」の入居から現在までのコミュニティの状況と、われわれの活動を含む支援の状況を紹介してきたが、最後に筆者がいま一度念を押しておきたいことがある。それは仮設住宅では、共助型の新たなコミュニティを育むことができるということである。図らずも従前コミュニティが散り散りとなって多地域から寄せ集まった仮設住宅は、今回の大震災で山ほど生み出されたわけであるが、それを単に悲劇として捉えるのではなく、むしろ未来への転機として捉えてコミュニティを再構築していくことが重要ではないかと考える。また、支援活動を実施していくうえでは、仮設居住者の復興への意欲が高まっていくような取り組みを展開していくこともまた重要な要件であると考えられる。そうした点については、小さなスケールではあるが、仮設カスタマイズは意外と効果があったように感じている。今後は居住者主体の復興住宅づくりと仮設カスタマイズを並行してサポートしていくことになるが、われわれも楽しみながら展開していくつもりである。

## 《 補 注 》

本稿は、季刊まちづくり 33（2012.1号，p34-37），財団法人日本住宅協会の機関紙「住宅」（2012.3号，p145-149）に寄稿した文章に，その後の活動の進展に合わせて，加筆・編集を施したものである。